

本稿は、1924 年から 1934 年までの期間における長岡高等工業学校と地域の機械工業の発展との関係を明らかにしようとするものである。

新潟県第 2 の都市である長岡市は 1880 年代後半から 1910 年代にかけて、石油の産出によって大きく成長したが、1907 年をピークに石油の産出は減少した。その結果、1910 年頃、石油関連産業から他の産業へと産業構造を転換する必要に迫られた。石油ポンプや鑿井機などの輸入品の保守の経験蓄積を基に、長岡市は、日本の機械工業とくに工作機械製造の中心となることができるのではないかと期待した。しかしながら、熟練工に依存する機械工業から互換性を基とする近代的な機械工業への転換は困難であった。長岡市は、政府に対し、近代的な機械工業への転換を唱導する技術者を養成するため、官立の高等工業学校を設置するよう請願した。こうして、1924 年、長岡高等工業学校が創設された。わが国では、第二次大戦前、高等工業学校は大学工学部に匹敵する存在であった。

調査の結果、以下の 3 点を指摘する。第 1 に、校長の福田為造は、技術者養成のみならず、1932 年に商工会議所の協力を得て、地域の小規模鉄工所に助言を与えるための技術相談所を設立した。第 2 に、相談所では、機械科教員が地域の小規模鉄工所に互換性の基となる精密測定法を教えるとともに硬合金などの特殊鋼などでできた最新の切削工具の使用を教えた。第 3 に、この工業相談所は、1932 年 10 月から 1934 年 3 月まで、324 件の工業相談を行った。